

「日本のあかりのうつりかわり」

— 古灯器からガス灯へ —

会期:2022年 7月16日(土) ~ 9月19日(月・祝)

会場:ガスミュージアム ガス灯館2階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、2022年度第二回企画展として、2022年7月16日(土)から9月19日(月・祝)までの期間、『「日本のあかりのうつりかわり」—古灯器からガス灯へ』展を開催します。

かつてヒトが手に入れた「炎」は、大昔より調理や暖房のほか、闇を照らす照明の光源として利用され、私たちの暮らしと文化を支える役割を担ってきました。

炎のあかりは、薪や油、ろうそくなどを燃やす、さまざまな照明器具として、日本の伝統文化のなかで生まれ、江戸から明治にかけて様々な工芸の技を活用した風情ある灯器が生まれていきます。

そして今から150年前、明治5年(1872)に文明開化の象徴としてガス灯のあかりが登場します。ガス灯は、日本の伝統文化と西欧の近代文明が融合した、暮らしのなかの炎のあかりの到達点でした。

この展示会では、「ガス灯」の前史として、日本の人々が明るく使いやすいあかりを求めて編み出した、和の古灯器を紹介いたします。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】

学芸員 高橋 豊

【薪のあかり】

古代からのあかりの燃料は、植物自体を直接燃やして利用していました。木材を棒状に加工した「薪」をはじめ、油分を多く含んだ松の根を細かく裂いた「ひで」や、竹を燃やして利用しました。

屋外では、たき火やかかり火などが用いられ、室内では囲炉裏の火にくわえ、ひでばちや松灯蓋(まつとうがい)などのあかりが登場してきます。

1)ひでばち 年代:不詳

松の根を加工した「ひで」を燃やして利用するあかりです。石製のものはひでばちと呼ばれます。

上部のくぼんだ部分の一部は突起状に加工され、「ひで」を燃やす際に空気を取り込みやすくしています。土間などの作業をおこなう脇で、火を灯して利用されました。

2)松灯蓋(まつとうがい) 年代:不詳

3)堀子(ほりこ) 年代:不詳

【油のあかり】

あかりの燃料は、植物の実や種、魚やなどから油を絞り、利用されました。

植物から絞った油は、奈良時代からエゴマを原料とした油が利用されていました。魚の油は臭いや煙がでるため、室内のあかりには向きませんでした。

江戸時代に菜種油の生産が増えて普及してくると、用途に合わせた、さまざまなあかりが登場します。



4)瓦灯
年代:不詳

油を入れた皿に、浸した灯心の先を皿の縁の先にのぼして、火を灯した火皿を本体の上に乗せて利用します。就寝時などほのかな光を利用するときは、火皿を内部に移してスリットから漏れる光で照らしました。本体が瓦質のものが多いところから、「瓦灯」(かとう)と総称されています。

5)瓦灯 年代:不詳

6)自在灯台 年代:不詳

7)牛糞灯台 年代:不詳

古くからある形状のあかりで、台座が牛糞の形に似ているところから、このような名称で呼ばれます。照明学会が昭和6年(1931)に日本の古い照明器具をまとめた、『日本古灯器大観』でこの名称で紹介されています。

「行灯(あんどん)」

紙におおわれたなかで灯した火を利用して、広がりのある柔らかな光で照らし出すあかりの道具です。室町時代ぐらいより利用され始めた行灯は、日本人の暮らしに根付いたあかりで、さまざまな階層や地域、使用方法に合わせて、豊富な形態のあかりが登場しました。

当初は裸火のあかりでしたが、明治30年代以降は発光体であるマントルを利用することで、裸火のガス灯に比べ、より明るく白い光で照らすガス灯として利用できるようになり、全盛期を迎えました。炎のあかりが進化した到達点、それが「ガス灯」であると言えます。



光の比較
裸火ガス灯
57)裸火ガスランプ



マントルガス灯
年代:明治時代



58)両用ガスランプ 年代:明治時代
天井に固定設置して利用するガス灯で、また管の途中で分岐をして熱用のガス器具を利用できるようになっています。

当時のカタログでは、「両用ランプ」と紹介されています。

59)下向一灯ガスランプ 年代:明治時代



60)藤原式一出腕ガスランプ 年代:大正時代

おもな参考文献

あかりの古道具
坪内富士夫 (株)光芸出版 1987年
くらしを変えてきた あかりの大研究
たき火、ろうそくからLEDまで
深光富士男 (株)PHP研究所 2010年
あかり (財)日本のあかり博物館 1997年
日本のあかり 片山光男 静岡新聞社 2004年
あかりのフォークロア 照明文化研究会編
(株)柴田書店 1976年

45)取っ手蓋付ひょうそく 年代:不詳
急須型のひょうそくで、注ぎ口部分より灯芯(とうしん)を出して火を灯しました。

46)取っ手蓋付ひょうそく 年代:不詳

48)掛け型ひょうそく 年代:不詳

「豆ランプ」

小さくて機能的な「豆ランプ」は、日本で考案されたともいわれています。

高さ15センチほどの小型の石油ランプで、形状や材質など様々に工夫がされたものがあります。一時的にあかりが必要な場所で利用され、持ち運びしやすいよう取っ手の付いたものもありました。



49)ガラス製豆ランプ(一組)
年代:明治時代



50)木台付豆ランプ
年代:明治時代



51)ガラス製豆ランプ
年代:明治時代



52)ガラス製取っ手付豆ランプ
年代:明治時代

53)ガラス製取っ手付豆ランプ
年代:明治時代

54)ガラス製取っ手付豆ランプ
年代:明治時代

55)ガラス製豆ランプ
年代:明治時代

56)ガラス製豆ランプ
年代:明治時代

【ガスのあかり】

明治5年(1872)に横浜に登場したガス灯は、その炎の明るさから、「開化を象徴するあかり」として受け止められました。

これまでのあかりとガス灯が異なる点は、ガス製造工場から配管により燃料が供給されるという点です。

そのため燃料の補給の必要はなく自由にあかりが灯せる反面、照設置場所が固定されることになり、以後登場する新しいあかりは、建物の設備として設置されるようになります。



8) 角型行灯
年代:不詳

9) 掛け行灯

11) 名古屋行灯

12) 遠州行灯

円筒形の紙の覆い部分が半分ずつ二重になっており、回転させて開閉して火を灯します。名称は小堀遠州が考案したともいわれているほか、形状から円周行灯とも呼ばれます。

【蠟燭(ろうそく)のあかり】

六世紀の仏教伝来と共に日本に登場した蠟燭(以後:ろうそく)は、蜂蜜の巣を原料とした「蜜ろうそく」が利用されましたが、輸入品で大変高価なものでした。持ち運びしやすい固形の燃料であり、室町時代になると国内でも製造されるようになりました。江戸時代になり漆や櫨(はぜ)の実を原料とするろうそくが登場すると、利用が広がってゆき、合わせて様々なあかりの道具も登場しました。



13) 木製燭台
年代:天和元年(1681)ごろ

15) 角型雪洞手燭(ぼんぼりてしよく) 年代:不詳

16) 馬上提灯



17) 木製曲げもの
籠灯(かんどう)
年代:不詳



籠灯(かんどう)点灯風景

年代:不詳



10) 有明行灯
年代:不詳

年代:不詳

年代:不詳

年代:不詳

一方向を照らすのに適したあかりです。桶形の本体の素材は木製や金属製のものがありますが、特徴は様々な方向に本体を動かしても、内部の組み合わせた2つの金輪が動き、ろうそくの灯りが常に上を向くような構造となっています。

【石油のあかり】

江戸時代末期に外国からもたらされた石油ランプですが、当初は本体や燃料が共に輸入品であったため、大変高価なものでした。明治時代になり、本体の国産化や燃料の石油が国内でも生産されるようになると、全国各地で利用されるようになりました。



18) 臭水灯台
年代:不詳

19) 木製花笠ランプ

【アセチレンガスのあかり】

燃料のアセチレンガスは、カルシウムカーバイドに、水滴をたらしながら発生させます。日本では明治30年代より利用されるようになり、強く白い光をはなちますが、特有の臭いがするため、屋外や集魚灯などで多く利用されました。

21) 吊下式アセチレンランプ 年代:明治時代

【かたちや機能に特徴のあるあかり】

時代を経るに従って、あかりの燃料はより効率よくまた使いやすく工夫され、用途に応じたあかりの道具が登場しました。形状も使いやすさを求めるだけでなく、かたちや機能を凝らしたあかりも登場しました。ここではそのいくつかを紹介します。



22) 雁足短檠
年代:不詳



20) 竹製乳白色丸笠ランプ
年代:明治時代

年代:明治時代

【アセチレンガスのあかり】

燃料のアセチレンガスは、カルシウムカーバイドに、水滴をたらしながら発生させます。日本では明治30年代より利用されるようになり、強く白い光をはなちますが、特有の臭いがするため、屋外や集魚灯などで多く利用されました。

21) 吊下式アセチレンランプ 年代:明治時代

【かたちや機能に特徴のあるあかり】

時代を経るに従って、あかりの燃料はより効率よくまた使いやすく工夫され、用途に応じたあかりの道具が登場しました。形状も使いやすさを求めるだけでなく、かたちや機能を凝らしたあかりも登場しました。ここではそのいくつかを紹介します。



26) 無盡灯
年代:江戸時代



23) 竹燭台 年代:不詳

茶席で使用されるためのあかりで、陶器の台座に開口した竹製の支柱への芯切りの配置、芯切りを掛ける金具と一体となった銅製の口受けと、非常に趣向が凝らされています。

24) 舟行灯(ふなあんどん)

年代:不詳

25) 金網行灯

年代:不詳

【手元を照らすあかり】

室内外を広く照らす照明器具だけでなく、身のまわりや手元を照らす様々なあかりの道具を、このコーナーでは紹介します。

「手燭(てしよく)」

持ち手のついた蠟燭のあかりです。移動するときに利用し、持ち手が足の1本を兼ねています。



28) 漆塗り朱色手燭
年代:不詳

27) 漆塗り小豆色手燭

年代:不詳

資料「28」と同じ形状をした色違いの漆仕上げの手燭です。茶席などで使用されたと考えられます。

29) 両用手燭

年代:不詳

持ち手の部分を稼動伸縮させることで、燭台としても手燭としても利用することができます。



30) ねじり持ち手燭
年代:不詳

31) 鉄製燭台(一組)

年代:明治時代

置くだけでなく、提げて使用もできる燭台で、背後の四角の突起は、マッチ箱を差しておくためのものです。

32) 真鍮製手燭

年代:不詳

33) 自在手燭

年代:不詳

「さし燭」

「きったて」とも呼ばれます。本体の一部が鋭く尖っており、外出先の作業場などに、提げたり差したりして固定するあかりの道具です。一時的に固定して利用するあかりで、場所に合わせて臨機応変に使用されました。

34) きったて

年代:不詳



35) きったて
年代:不詳

36) きったて

37) きったて

年代:不詳

年代:不詳



38) 打ち燭
年代:不詳

「乗燭(ひょうそく)」

長時間あかりが利用できるよう、油を溜める部分がお椀状になっています。中心部に灯芯をささえる突起物があるものや、急須のカタチをしたもの、持ち手のついたものなど、様々な形状のものがありました。ひょうそくのなかでも茶碗型をしたものは、「たんころ」とも呼ばれます。漢字の「乗」は「手に持つ」の意味があり、手に持つ軽便なあかりを意味していると考えられます。

39) ひょうそく(一組)

年代:不詳

40) ひょうそく

年代:不詳



41) ひょうそく
年代:不詳



ひょうそく点灯風景

42) 取っ手蓋付ひょうそく

43) ひょうそく

年代:不詳

年代:不詳



44) 取っ手蓋付ひょうそく
年代:不詳



47) 油壺型ひょうそく
年代:不詳